

## 国際主義を実践しよう（一九八一年五・三〇声明より）

国際主義にもとづく闘いとは、どのように闘うことなのか？

世界革命の一環として日本革命を実現していくために、世界の人民の一部として日本労働者階級・人民の解放を実現するために、どのように闘うべきでしょうか。かつて私たちは、単一の世界プロ独実現にむけて闘うこと、そして、他民族のためにすすんで犠牲を払う覚悟が国際主義であると、ゲバラの崇高な犠牲性の中に、国

際主義をみてきました。しかし、私たちは、足元の闘いを国際主義の実現としてとらえきれず、現実の自らの闘いが国際主義か否かを、対目的に検証しきれず、国際主義と現実の間に万里の長城を築き、遠くばかりをみつめながら国内で闘っていました。実際の国際主義は、どこか遠くにあるものではなく、今、持場で、どのように闘っているかに示されます。

労働者階級が、自分たち自身を資本のくびきから、すべての人民を伴って解放するためには、世界の労働者が

団結して資本の支配をうちたおさなければなりません。反共戦略を要とする帝国主義によって益々共通の運命におかれ、そのことによって組織される労働者階級、被抑圧民族、人民は、国境を越えた共通の利益「人としての価値を獲得するために」（マルクス）闘いつづけます。階級対立を自覚し、更に階級的自覚を全世界の味方の同質の価値によって結びあうことは、人としての価値を獲得する闘いであるが故に、民族、国境を越えた人の人に対する態度として示されてきます。他の国家、民族の共通の運命におかれた人民のことを、自分の問題として考えるか否かに示されます。

国境にへだてられた帝国主義本国労働者階級が、階級対立、資本主義のしくみを知り自らの社会的存在を発見し、敵と対決する時、力と自覚をもちます。そして社会的存在の発見、自己の肯定的理解を通して、更に、団結にむけて、否定的に普遍的価値に結ばれようとする時、階級性の中味として、共通の運命におかれた人に対する態度が問われます。同様に、民族解放をめざす人民が、帝国主義支配を通して民族のおかれている実情を把握し、民族の確固とした確立の闘い、民族の徹底した肯定的理解を通して、団結にむけて民族排外主義的傾向を否

定しつつ、普遍的価値に結ばれようとする時、階級性の中味として、共通の運命におかれた人に対する態度が問われます。この共感を土台として国際主義が育ちます。権力の奪取形態は一国的でありながら、共通の運命にある他民族、国家の人民の闘いを自らのことのように考える思想性の中に階級性があり、国際主義の基本精神があります。それはまた、となりにいる仲間に対する態度と共通するものです。

私たちは、過去「国際」という形態に価値をおき、中身をよくとらえずにいたと思います。

国際主義を実現する闘いは、国際主義の基本精神にもとづく、党の政治的立場として、路線、政策、戦術の中に示されます。世界の人民が階級的に統一されていくためには、どのような路線の立場にもとづいて闘っていくのか、ということとして問われます。

レーニンとは、どのような立場で国際主義を貫いてきたのでしょうか？

レーニンの立場、目的意識は、常に、世界単一プロレタリアートの形成という価値に貫かれていました。ツァー打倒を考える時、ひるがえって、味方の統一を念頭におくが故に、民族問題を解決する要求も生まれます。

他民族、他の国の立場から、自らの立場を常に検証する時、同質化(統一)にむけた条件の環をつかむことが出来ます。ここにレーニンの思想的根本が示されています。

帝国主義段階に入って、帝国主義が世界体系をつくり、一連の民族に対する共同の抑圧によって、全世界人民の敵となった時、レーニンは、民族、国家を越えて階級連帯を妨げる民族主義的偏向や、民族問題は存在しないという世界主義的偏向を克服する必要性がありました。民族の不均等発展は、帝国主義支配の産物であり、民族を越える党の思想的同質化を媒介に、民族間の思想的にも物質的にも真に対等、平等な条件をつくることが問われます。そこに細分化された国家が止揚され、階級的統一を軸に民族的結合を世界社会主義へと導く力が育成されます。レーニンが、抑圧民族と、被抑圧民族を区別したのも、統一の障害を克服するためだったのです。帝国主義と闘い、民族の自発性にもとづいて被抑圧民族が自己を解放すること、帝国主義の強制的な「統一」(併合)や、「分離」(領土分割)でなく、自由な統一の前提として、民族自決権をかかげました。

また、ロシア革命以降、社会主義と資本主義との二つ

社会主義が勝利し、ソ連一国であった時代から、いくつかの社会主義国の誕生をもたらす過程で、民族的、国家的対等の条件を形成する方向へと国際主義的支援が問われました。新しい社会主義諸国もまた、「原型」の役割、民族的自立経済を土台とする対等の条件の形成を通して、単一の社会主義世界経済への過渡をうみだすことが要求されたのです。

しかし、新たな社会主義国が、過去の帝国主義支配の遺産である不均等発展の克服として、自国人民に依拠した自力更生にもとづく自立した民族経済をうちたて、対等の条件を形成するように、先達ソ連は、援助しきれませんでした。逆に、過去の帝国主義支配の遺産、不均等発展を固定化し、その上に社会主義の拡大を土台とした建設を行ったために、各国の社会主義経済が、分業を固定化させる条件を形成し、現在に至る矛盾を導く根拠となりました。それは同時に、援助を受ける側の主体性の問題でもあります。民族的対等を形成しきれなかった相互関係は、社会主義諸国の団結の条件を後退させ、対立や、依存の歴史をうみだしてきました。

敵を打倒し、味方を統一する環は何か？

常に、その環を、共通の価値として、相互の闘いを物

の価値の闘争が基本矛盾となる中で、「後進国」でも、資本主義を経なくとも社会主義にすむことが出来ること、ソビエトは封建的、半封建的な農民諸関係に適用しうることを明確にしました。反帝闘争はプロ、小ブルを問わず担えるものであり、その中で、党が、社会主義という価値にむけて、民族間の階級の統一をかちとるという立場に更に発展させました。レーニンの問題のたて方は、いつも、敵が明確であり、それにうちかつには、味方をどう同質化(統一)していくのか？という目的意識性に貫かれていました。

しかし、レーニンの思想的立場は、第三インター以降の闘いの中へ、十分継承しきれずにきました。

一九二八年共産主義インターナショナルの綱領で、当時の条件に照らし、「ソ連邦の意義とその国際的な革命的義務」を規定しています。その中で、ソ連を、「やがてうちたてるはずの世界ソビエト社会主義共和国連邦に結集したすべての国々の民族の、兄弟のような相互関係の原型、単一の社会主義世界経済への、すべての国々の労働者の経済的統合の原型という役割を演じている」ことを意義の要として規定してきました。ここにソ連社会主義原型論の基本が示されていました。そして、それ以降、

質化していかなければ、真に対等の条件、階級的結合へと、民族間の矛盾を止揚しえないという教訓として、私たちは、現在の社会主義諸国のあり方から学んできました。

国際主義の要は、反帝と自力更生の路線的立場にある

現在、国際主義は、「反帝と自力更生の路線的立場」を土台にし、味方を同質化しあうこととして問われています。それは、一言でいえば「帝国主義と闘い、自国人民の力に依拠して闘う立場」を土台に、各民族指導勢力が、相互の教訓を学びあい、味方の同質化を、世界プロ独にむけて果たすことを意味します。

現在、「社会主義」の価値観があれこれに異なってしまう中で、味方の統一の環として、何をつかまなければいけないのか、どのように闘うことによって、各国、各民族の闘いが同質化するように闘えるのか？この要をしっかりとふまえて闘うことが、海をへだたれた階級闘争を一つの価値において共に闘っていく条件を形成していくことが出来ます。

現在の日々の闘いは、資本主義生産関係にもとづく帝国主義の階級的支配と民族的抑圧に対決し、その中か

ら、社会主義意識を形成し、社会主義生産関係を土台に、新しい人と人との関係を形成している過程にあります。資本主義生産関係が存在する限り、社会主義國、社会主義勢力も、そこから自由ではなく、不断に反映をうけています。だからこそ、より、反帝のもとに党の目的意識を統一し、反帝の力の源泉である自國人民に依拠して闘うことによって、単一の世界労働者階級解放にむけて同質化しなければなりません。この観点に貫かれて、始めて、日本の社会主義建設も、民族自立経済を土台に、國際根拠地としての役割を果たしていく一個二重の準備を展望することが出来ます。

現在、世界党が存在せず、対象化される党的指導勢力の社会的実践が、一国的に制約さればされる程、一国的な利害に拜跪しがちです。世界情勢を二元的にとらえ、共通の目的に向って、統一しあう環をしっかりと握って進むことがより問われています。

私たちは、世界の闘いの中に、多くの教訓をみる事が出来ます。反帝と自力更生を要し闘いえなければ、必ず、偏向を生みだしてしまうという教訓です。

アフガニスタン人民民主党は、クーデターの形態によって権力奪取してきました。反帝の立場にありながらも、

ソ連の、反帝各国、各民族支援の教訓もあります。

ソ連は、デタントによる帝国主義との緊張緩和と、一方に、「第三世界」支援の、二つの政策を基本に、國際路線を貫いています。反帝闘争を担う勢力への支援は、「第三世界」の革命勢力を後方として支えています。ここに、反革命各国支配層が、米帝の後楯を背景に、國際反革命同盟の力によって、各国の革命を圧殺しようとする現在の世界情勢の下で、各国革命勢力は、一国的に対決するために地域的、國際的な反帝勢力の同盟を要求しています。しかし、各国の革命は、その國の人民自身の力で担わなければ、真に反帝の力の源泉をつくりえず、反帝の闘いを継続しえません。

人民の共感を組織し、その國の人民の闘いを自立的に担えるようにしなければ、依存を生みだし、真の対等への条件を形成しえません。

私たち自身においてもそうです。パレスチナ革命共闘から出発し、世界の同志友人との兄弟的団結を形成していく過程において、相互の個別利害を止揚し、自國人民に依拠し責任を負う立場から共通の、反帝の目標に向けて闘う、対等の相互関係を形成してきました。

その過程には、支配—被支配的傾向との闘い、民族的

しかし、人民に依拠し、人民を援助していく党の役割を十分形成しませんでした。そのために、ソ連の力に依存して、帝国主義に対決するという方法によって、矛盾を克服するというあり方に結果しました。

更にポーランドにおいては、党の問題として、建国以来の長期に渡って、ソ連の力に依存し、力の源泉であるポーランド人民の力をひきだせずきた分、人民の力を結集しきれず、人民の要求と創造性を、党の力にしえずにきました。

自主労組「連帯」の求める党の革命を、反帝闘争と建國の力にしうるかどうか今後の発展の方向が示されています。

中国の反社帝路線の教訓もあります。

一国的な権力奪取の後に、自國內の階級矛盾と、世界の階級矛盾を二元的にとらえず、自國內の矛盾を中心に、世界の階級矛盾を二元化してとらえなければ、民族主義的偏向に陥るといふ教訓です。

自力更生は、人民に依拠した力であり、世界階級闘争の基本矛盾をなす資本主義生産を解体する反帝闘争と結びつかなければ、帝国主義を延命させ、自らの革命の獲得物を破壊していく結果を生みます。

偏向との闘い、そして、自力更生を物に一面化する傾向との闘いを自らの自己批判の中から教訓としました。その中で、党的対等にもとづいて、民族的不平等を階級的に統一する条件を常に矛盾の止揚として、つかみとることを学んできました。

私たちは、すべての革命勢力が國際主義の要として、反帝と自力更生の路線の立場を堅持し、同質化しあう相互の党の革命によって、学びあい援助しあい教訓を生かしながらいく過程こそ、敵を打倒し世界の闘う勢力を統一する過程であると確信しています。

現在の情勢下において、一見、世界は複雑な様相を呈しています。帝国主義支配が巧妙になり、他方、社会主義國同士が戦争し、人民の希望のとりであった社会主義が、解体しているようにみえます。ある人々は、社会主義に希望を失い、ある人々は、スターリン主義の末路だといひ、ある人々は、覇権、大國主義を非難し、ある人々は、民族主義同士の対立で社会主義とは縁のないことと説明しています。

しかし、本質的な事実、あきらかに帝国主義に有利な材料を与えているという現実です。

当事國人民の困難ばかりか、遅れて社会主義実現をめ

ざし闘っている人々の闘いを阻害する要因を形成しているのは、まぎれもない事実です。

しかし、歴史的にみれば、資本主義は、産業革命から数えても二〇〇年の歴史をもち、社会主義は、ロシア革命からまだ六〇余年の経験しか有していません。資本主義の汚物の中から生まれ、創造し、闘争し、建国過程にある社会主義は、その制約の中で、たぐさんの誤りを犯しながら前進しています。遅れて社会主義を建設する私たちは、教訓を総括し、学び、誤りを自らの問題として克服していくことによって、社会主義を正しい方向にかちとっていく立場にたたなければならぬと思います。レーニンには、マルクス主義は、「今後、更に、あらゆる方向に前進しなければならぬ一つの科学の要石をおいた」にすぎないとかって言いました。現実を変革することに、共産主義の闘いの価値があり、現実の中から、誤りを正し勝利に結びつけていくことに、革命主体の立場があります。正しい社会主義でないとして、ソ連を断罪し、中国やベトナムに絶望することは、自らの闘いの総括のなさを示します。そうではなく、逆に、より正しく社会主義をつかみ、現実の中から教訓を導き、どのような社会主義を実現し、日本革命を国際根拠地として形成してい

くのか、その実現にむけた歩一歩として、今の闘いの方向をうちきたえていくことが問われています。

そして、その闘いをこそ、日本人同志友人と共に私たちは担いぬきたいと思えます。

日本階級闘争の教訓の中から正しい党の役割をつかもう  
私たちは自身がそうであったように、日本階級闘争で指導的力を発揮すべき党が、党の役割を正しくつかみえていません。その結果、世界革命の一環としての、日本階級闘争の方向を、国際主義の要を土台として闘いきれていない現実を、決定的に直視せねばならないと私たちは考えています。

私たちは、自らの七〇年代における敗北をとらえかえす中から、そして、世界の同志、友人と、教訓と経験を学びあう中から、党の価値、党の役割についてとらえかえす契機を、幾度も、もちました。かつて日本階級闘争の中で、私たちは、党の価値を、「闘う党か否か」という現実の即自的運動・戦術の中でとらえていました。そのために、在外主体としての任務も、「共同武装闘争による組織化」に一面化して闘ってきました。いわば、党の役割を、武装闘争などの運動的飛躍に置き、革命戦術のエ

しており、自らの立脚すべき統一性の欠如を総括しないまま、戦後もそれらをひきずって出発してしまっただけです。  
未総括故に、党の分裂状況を止揚することが、運動的突破、武装闘争へと拝跪し、五〇年代の敗北を生みだしました。そこで総括が根底的に問われたのですが、しかしなお、五〇年問題の総括の中で正しい党の役割をつかみきれず、現在に至るいわば、最大限綱領主義的傾向と、行動綱領主義的傾向の一面性を止揚しきれずに、新左翼、日本共産党の現実へと結果しています。

戦前に問われた山川イズム、福本イズムの根本問題も、党と人民の関係の正しい規定、つまり、党の役割を正しくつかみきれずにきた結果に他ならず、また、五〇年問題においても、根本において、止揚しきれしていません。私たちは、自らの敗北を、先達の敗北に学びながら、「日本共産主義運動の総括を統一する闘い」として、指導勢力の革命を果たさねばならない、そして、その要が、五〇年問題から、党の役割をつかみとることである」と教訓化してきました。

私たちは、五〇年問題において私たちの先達が、痛苦の中で教訓をつかみ、組織、つまり、党の価値をとらえ

スカレットをもって、「闘う党」としての非妥協性を形成しようとしてきたのです。連合赤軍の誤りと敗北も、同様の価値から出発し、止揚しきれずに革命の害毒を根底までおし広げていきました。

私たちは、七四年七五年の翻訳作戦、ストック被逮捕自供に至る敗北の中で、運動的飛躍が、必ずしも、自らを強化しないことを検証し、「自分たち党主体」が「闘う」ことに価値をおいているあり方を、転倒させ、労働者階級・人民を革命主体とする立場から、党の役割を、とらえかえしてきました。自分たち中心の考え方から、労働者階級・人民中心の考え方へ、つまり、人民原理を土台に、これまでのプント、新左翼的あり方を、自らの問題としてとらえかえしていきました。その時私たちは、日本階級闘争が、どのような形成過程の中にあり、そこにおいてなお、根底的な総括をなさずに現在に至っていることを痛感せざるをえませんでした。

戦前、私たちの先達である日本共産党は、組織として闘いえなかつた現実を直視せず、もっとも重要な戦前の十五年に及ぶ指導機関の解体から教訓をつかみきれず、戦後の民主化の高揚の流れに未総括のまま身をゆだねました。党的結果軸が一貫して外在的にコミンテルンに依存

かえってきたことを知っています。それが党建設と大衆工作の、「二本足」路線であり、「組織戦術」の意義へと結実し、他方、旧態然とした大衆闘争機関に留まったポイントが、未総括を重ねたが故に、党的再生を果たせなかつたことも学習してきました。

しかし、痛苦であっても、なお、五〇年問題が、真に、党の役割を総括しきれなかつたことが、現在の不十分性の中に示されていることを私たちは直視しなければならぬと思います。それは、まず第一に、スターリニズムをスターリンの問題として、外在的な打倒対象、または、被害者の立場に自らをおいているために、自己批判としてとらえかえされず、反スタを言いながら、現実には、スターリニズムの無謬の党観に立脚しつづけていることに示されています。

党イコール普遍性という立場にある無謬の党観を克服することが、スターリニズムを、凌駕していく闘いであり、党中心主義を克服していく闘いであると思います。「二人の経験は、世界の党の経験に對置することは出来ない。」という一面の強調は、どれだけ党を死に至らしめてきたでしょう。

自分を普遍性と考えれば、実体は、階級の一部であり、

革命を実現する党は、階級闘争のすべての当事者として、総括と教訓を導き、自らの問題として、凌駕してすまなければなりません。労働者階級・人民を主体に考える時、他組織の、どのような敗北であれ、敵と、労働者階級・人民の攻防の中に、害毒は流れます。それを、ひきうけて克服する指導勢力こそが、真に階級的力量を形成しうると考えます。何故なら党は、労働者階級・人民に創られ、選択されるものであるからです。

党の役割を正しくつかむことによって、国際主義を実践しよう

総括は立脚点をつくり、目的意識を形成します。

目的意識は遠くにあるものではなく、現在の闘い方、判断力を決定します。その意味で、私たちは、未克服にある日本階級闘争の、指導性の問題は、五〇年問題を要として、あることを教訓としてきました。そして、党の役割とは何か？を、実際の先達の教訓、その未克服の中から学んできました。

それはまず第一に、党と人民の関係の中から、党の役割をつかむこと、つまり、労働者階級・人民自身が、革命の主体であり、党は、その実現にむけて援助する役割を

場所的歴史的に規定された自然成長性、認識の限界をもつて無自覚になります。この主観に一面的に立脚すれば、党は、「普遍性」故に誤りは犯さないととらえ、外因や個人の責任となり、また、どちらが正しいか形式論理で、対応することになります。そこからは、革命勝利にむけて、マルクス主義を発展させえず、党の、「普遍性」を言うことに価値があり、保守的なものとなります。

党の部分性を自覚し、それと闘い、党に党を革命する総括がなければ、「普遍性」は、死んだ教条に陥ってしまいます。ここからは権力奪取にむけた統一戦線は生まれず、統一戦線は、党の下部組織におとしこめられてしまいます。そして第二に、第一に規定されて、共産主義が、現実の運動でありながら、現実が目的にむかって変革されたか否かに価値がおかれず、言ってきたことの正しさに価値をおくあり方です。現実変革に価値をおく革命の価値基準においては、言ってきたことが、物質化されれば、その主観は正しく、物質化されなければ、法則に合致しなかつたという結果によって、主観が正しくないと、とらえるべきだと私たちは考えます。

そして第三に、責任の問題です。

負っていること。第二に、党が、援助すべき中心的役割は、世界単一の労働者階級の解放を世界革命の一環として実現するためには、①国際主義として革命の同質化をめざさねばならず、②権力奪取にむけた条件を形成しなければならず、③個々の闘いを蜂起の陣型に結びつけていく、独自の政治軍事力量、党組織をもって担わなければならない。そして第三に、唯物論的には、党は、労働者階級の一部であり、一部の実体が、国際主義、権力問題、蜂起の計画にもとづく党組織をもって、労働者階級・人民を援助するためには、党は、人民の社会的実践を不断に統合(学習・総括)しなければなりません。この統合によって、自らを革命しつづける自己批判こそ党の目的意識性の実践を、党の判断力として、さし示します。私たちは、総括による統一を立脚点とする、つまり、総括による党の革命を生命力としてこそ、真に、不断に党としての力量を物質化しうると考えています。

レーニンが、ペテルブルグの牢獄の中で、一八九六年に書いた最初の社会民主党綱領草案において、党の役割を次のように提起しています。

「ロシア社会民主党は、労働者の階級的自覚を発達させ、彼らの組織化に助力し、闘争の任務と目標を指示す

ることによってロシア労働者階級のこの闘争を援助することを自己の任務として宣言する。」(「社会民主党綱領草案と解説」)

レーニンは「社会主義の志向、大昔からつづいて人間による人間の搾取を除去しようとする志向が大工場によってつくりだされた生活条件から生まれる人民運動と、どのようにして結びつかなければならぬか」という点で、「党の活動が、労働者の階級闘争を助力すること」であり、「労働者がすでに自分でやりはじめているこの闘争において彼らを援助することである。」と規定しました。

この援助する観点で党の役割を果たそうとするとき、運動の自然発生性、個別性の中から、その学習を通して、常に目的意識性に結びつく闘いの方向をつかみ、政治権力を奪取する計画としての戦術をのみみだすことが出来たのだと思います。

党の役割は、「党が普遍性である」ことを認識させるのではなく、そして党のまわりに、人民を実体的に統合する党中心主義ではなく、反対に、革命の当面の目的と、究極的な目標にむかって、階級の一部として、共に立ち、人民の社会的実践を総括する認識能力をたかめることに

準備をおしすすめ、戦術を勝利のために行使していかなければならぬと思います。

労働者階級・人民を主体とする「党の役割」をつかみきれなければ、真に、世界革命の一部として、日本労働者階級・人民の闘いを同質化させる役割を担えず、民族排外主義を越えて、諸民族の、階級的同質化、団結を、実現することが出来ません。

党は、階級的価値において、大国でも小国でも対等でありながら、同時に、歴史性に制約された諸民族間の抑圧と被抑圧は存在しています。党が国際主義を促すのは、各民族の労働者階級・人民が、一つの目的にむけて、一つの価値で、闘いぬくために、民族的差異を克服する条件をつくりだし解決していくためです。

日本共産主義運動の中で、国際主義の問題は、未だ解決されていないと、私たちは考えています。

もちろん、日本共産党は、コミンテルンの総括から、党の対等、党の自主性ということを導きました。しかし、それはあくまでも人民を革命主体とする側から党の役割をとらえられていないために、日本共産党にとつて、他の外国党との関係における自主路線でしかないという弱点があります。日本階級闘争において、日本人

によって、方向を示していくことです。不断に、現実の変革に価値をおき、目的にむかって、考え方を統一しあうよう援助していくことです。権力奪取の布陣と、物質的条件を、地下に独自に準備することによって、あらゆる機会を、革命の勝利的転化へ物質化させる力を育成することです。

私たちは、日本階級闘争の弱点の根本が、唯物論にたちきれていない現実としてあると思っています。現実の事実、自分や、自分たちにとっての一面的な事実ではなく、目的表現からみて社会関係性における全面的事実を直視することから、これまでの「マルクス・レーニン主義」の価値観を問わなければならず、党の役割を問わなければならぬと思います。

正しさを主張し証明することではなく、「勝つまで敗ける」階級闘争の現実の中で、一つ一つ敗北を勝利の土台に転化させていくことです。そのために個々の労働者階級・人民の闘いを総括統合し、国際的連関と、戦略的権力問題を解決する観点で闘いの方向をつかみ、再び、労働者階級・人民の中に返すことによって、労働者階級・人民自身の主体的闘いを援助していくことです。そして、現時点から蜂起の陣型にふさわしい党の、独自の

民の闘いを単一の世界労働者階級への同質化にむけて、現在どう闘っていくのかが、中心にとらえられていないためです。そのため、反帝の闘いも、抑圧民族という現実の世界における日本の位置をみきれず、米帝からの独立という位置に日本をおくことによって、民族的一国的実情に制約されています。

帝国主義本国人民の闘い程、そのプロレタリア国際主義において、反帝闘争を徹底させねばならないのです。しかし、党の対等を配慮する観点で、抑圧民族である日本階級闘争の世界的位置をつかみえていません。

日本革命の戦略問題も、そこから一国的偏向を生みだしています。

国際主義は、世界の人民が、単一の人間解放・階級解放をかちとっていくために、一つの敵と闘いながら味方を同質化し、相互に支援しあう観点に貫かれていなければ、実現しえないことです。

敵と味方の区別が明確にしきれず、自らが普遍性であることを証すために、となりにいる指導勢力の批判を自らの立脚基盤とするあり方は、主観的にはどうあれ、客観的には、帝国主義支配に猶予を与えているという現実が、克服されません。

民族排外主義と闘う道は、自国帝国主義と対決し、どのような路線の違いがあれ、国際的な反帝闘争の一翼を反帝勢力として意識的に結合しあい、そのことを通して路線の違いを、階級的同質化へとかちとっていくことだ

と私たちは考えています。この立場において一元的な世界認識にもとづき、世界革命の一環としての日本革命の現時点における闘いを、権力奪取にむけて準備していくことが問われています。